

唐詩の「空」について

小池一郎

一 王維「鹿柴」

盛唐の詩人・王維のよく知られた詩に、「鹿柴」がある。

鹿柴 王維

空山不見人 空山 人を見ず

但聞人語響 但ただ人語の響きを聞くのみ

返景入深林 返景 深林に入り

復照青苔上 復また照らす 青苔の上

これを、Pauline Yu は、次のように英訳している。⁽¹⁾

Deer Enclosure

Empty mountain, no man is seen.

(全唐詩卷二二八)

Only heard are echoes of men's talk.

Reflected light enters the deep wood

And shines again on blue-green moss.

原詩に比べて、過不足の無い訳だと言えよう。

空 山

「鹿柴」は、輞川くわくわの王維の別荘にあった鹿の囲いのようなもの。その付近に、友人の裴迪はいてきと遊んだ時の作で、「輞川集」二十首中の一首である。「空山」の出処として、石川忠久は、晋・常璩「華陽国志」の「独坐空山、放虎自衛」⁽²⁾（独り空山に坐し、虎を放って自ら衛る）を引くが、近年刊の劉琳校注「華陽国志校注」⁽³⁾に依れば、同書卷五「公孫述劉二牧志」の原文は、「独坐窮山、放虎自衛」となっていて、特に異文もないようである。宋（六朝劉宋—以下同）の謝靈運「廬山慧遠法師誄」⁽⁴⁾には、

晨掃虚房 晨あしたに虚房を掃き

夕泣空山 夕に空山に泣く

の表現がある。詩での用例としては、同じく宋の吳邁遠ぼえん「飛来双白鳥」の、

譬如空山草 譬たとえば空山の草の如し

零落心自知 落零 心に自みづから知る

が古い。「人なき山」⁽⁵⁾の意である。この他、梁・江淹の「無錫県歴山集」（無錫県歴山の集い）に、

窃悲杜蘅暮 窃ひそかに悲しむ 杜蘅とこう（植物名）の暮

「擲涕弔空山、なみだ涕を擲ぬぐいて 空山に弔う

*「弔」芸文類聚卷七作「即」。

また、同じく梁の陶弘景「寒夜怨」に、

悽切瞭唳傷夜情 悽切たる瞭唳りょうれい(鶴の鳴き声) 夜情を傷ましめ

空山霜滿高煙平 空山霜滿ちて 高煙平らかなり

と見える。唐以前の詩では、総じて「空山」の使用例は多くない。初唐に入ると、「空山」は詩に於いて、かなり一般的に使われるようになった。その中から、二例だけを左に挙げる。まず、魏徵の「述懷」に、

古木鳴寒鳥 古木 寒鳥鳴き

空山啼夜猿 空山 夜猿啼なく

(全唐詩卷三一)

また、王勃の「易陽早發」(易陽にて早つとに發す)に、

復此涼颿至 復た此こゝに涼颿至り

空山飛夜螢 空山 夜螢飛ぶ

(全唐詩卷五六)

王維には、「鹿柴」の他に、「過沈居士山居哭之」(沈居士の山居やまに過りて、これを哭す)に、

曙月孤鶯轉 曙月 孤鶯さえず轉り

空山五柳春 空山 五柳 春なり

(全唐詩卷一二七)

の用例がある。ここでは「彼の人の居ない山」の意が強いであろう。ところで、「鹿柴」の「空山不見人」とは、同義語反復ではないのか。詩にはそのような無駄は許されぬ以上、或いはまた、「空山」には「不見人」以外の何らか

の意味が含まれているのか。もう少し詩を読み進めてみよう。

人語響

「鹿柴」の第二句目「人語響」については、謝靈運の「林深響易奔」(林深くして響き奔り易し)を石川忠久は引く(「石門新宮所住、四面高山、廻溪石瀬、茂林脩竹」)。この他に六朝の詩では、梁・王筠の「聞情」に、

空、聞易成響、空聞 響きを成し易く

虚室自生光 虚室 自ずと光を生ず

また、陳・蕭詮の「賦得夜猿啼」(夜猿啼くを賦し得たり)には、

隔巖還嘯侶 巖を隔てて 還つて侶を嘯び

臨潭自響空 潭に臨めば 自ら空に響く

がある。盛唐では、作詩時期を王維「鹿柴」のそれと比定し難いが、劉長卿「浮石瀬」の

衆嶺猿嘯重 衆嶺 猿嘯 重なり

空、江、人、語、響、空江 人語 響く

を挙げたい。王維自身も「送李太守赴上洛」(李太守の上洛に赴くを送る)で、

野花開古戍 野花 古戍(とりで)に開き

行客響空林 行客 空林に響く

と作っている。「空」なる空間は、元来「響き易い」ものとして詩人たちに意識されている。「空」は、「響き」を

待っている、一種の極度に緊張した状態なのである。

(全唐詩卷一二七)

(全唐詩卷一四八)

深 林

第三句目「反景入深林」では、「山海經⁽⁶⁾」西山經の「是神也、主司反景」（この神は、主に反景を司る）に対する晋・郭璞⁽⁷⁾の注「日西入、則景反東照」（日西に入れば則ち景反って東照す）及び梁・劉孝綽の詩「侍宴集賢堂応令」（集賢堂に侍宴して応令す）の「反景入池林、餘光映泉石」（反景池林に入り 餘光泉石に映す）を引くのが注釈者の常である。「深林」は既に「楚辭」九章（涉江）に見える語であるが、先に挙げた謝靈運の一句「林深響易奔」との関連も考えられる。

青 苔

第四句「復照青苔上」。「復」は「入」と「照」をつなぐ働きをする。「入ってそしてまた照らす」。「復」にはまた「（おやまあ）光はこんな所まで照らしている」という感嘆の気持が含まれている。この句は、初唐・宋之問の詩「題鑒上人房」（鑒上人の房に題す）二首の二を意識しよう。（網川の別荘は元は宋之問の所有であった。）

題鑒上人房 宋之問

晚入応真理 晚に入つて 真理に応ず

経行尚未回 経行 尚お未だ回らず

房中無俗物 房中 俗物無く

林下有青苔 林下に 青苔有り

（全唐詩卷五三）

訪れた相手（鑒上人）は、夕暮れ時、仏教の修行に出かけたまま、まだ帰らない。そして主人の不在の間に、仏教の「真理」が「青苔⁽⁸⁾」として、この地上に人知れず啓示されている。王維「鹿柴」の「青苔」にも、同じ意図が隠され

てはいないだろうか。

不見人

翻って第一句の「不見人」は、一般的に人の姿の見えぬことを言うのではなくて、「主人」の不在を示すのではないだろうか。「易」艮卦(こんか)には、「行其庭、不見其人、无咎」(其の庭を行けども、其の人を見ず。咎なし)とある。「鹿柴」に於ても「人」は「其人」ではないだろうか。辺りの空気は緊張を帯びた「空」の状態である。その中を「人語」が響いてゆく。この「人語」を、私は、「其の人」の「誦経」の声と受け取りたいが、なお確証を持たない。(王維「山中寄諸弟妹」(全唐詩卷二二八)に、「山中多法侶、禪誦自為羣」とある。)ただ、「網川集」二十首全体には仏教的な色彩が濃く現われており、また、友人の裴迪以外の人間が詩中に現われることのないことは、指摘しておこう。

それはともかく、今、「響く空山」の中で、人間不在のままに、真理が現われ出ている。そのようなことを可能ならしめた「空」とは、そもそも何なのか。次に、詩における「空」について、まず唐詩以前のものから考えてみる。

二 唐詩以前の「空」

先 秦

「詩経」の「空」は、数例のみである。^(註)まず小雅「白駒」に、

皎皎白駒 皎皎たる白駒

在彼空谷 彼の空谷に在り

注釈の毛伝に「空は大なり」とある。同じく小雅の「節南山」に、

不弔昊天 昊天に弔あわれまれず

不宜空、我師 宜しく我が師（民衆）を空くさしむるべからず

毛伝に「空は窮なり。師は衆なり」と注す。また、小雅「大東」には、

小東大東 小東大東（東方の大小の国々）

杼柚其空、 杼柚（貢物の織物）其れ空く

とある。大雅「桑柔」には、

大風有隧 大風に隧みち有り

有空大谷 空たる大谷有り

毛伝に「隧は道なり」。後漢・許慎の「説文解字」^⑩には、「空は窾あななり。穴に従う。工声なり」とあり、清・段玉裁は「今の俗語の所謂孔あななり。天地の間も亦た一孔なる耳」と注している。「空」は本来、「穴」^{あな}「空洞になった空間」である。「詩経」の「空谷」「空大谷」の「空」は、その本来の意味、また毛伝が「窮なり」と注するのに当たる「空」（右の「大東」「桑柔」の例）は、本来の意味を動詞に転化させて出来たものと考えることができる。

「楚辞」^⑪九歌（大司命）には、

踰空、桑兮従女 空桑を踰こえて女なんじに従う

と見える。後漢・王逸は、「空桑は山名にして、司命の経る所なり」と注す。また、「楚辞」大招にも、

魂乎归来 魂よ帰り来たれ

定空、桑、只 空桑を定む

と見えるが、これは王逸「空桑は瑟の名なり」と注し、「或いは曰く、空桑は楚の地名なり」と異説を並記している。瑟の名とする場合は、「空」は瑟の中の空洞を示すであろう。(「定」の読みは諸説一致しない。)「楚辞」収録の諸篇の中では、この他に前漢・劉向の「九歎」において「空宇」(怨思)、「空虚」(憂苦)の語を用いているが、「楚辞」の原型をなすと考えられる(戦国時代作の)作品群には、このような用法は無かった。また、王逸が、宋玉「九弁」其一の「沈寥」の語に注して「曠蕩空虚なり」と述べ、劉向「九歎」(惜賢)の「寂寥」に「空無人民之貌也」(空しくして人民無き貌なり)、屈原(?)「遠遊」の「野寂漠其無人」(野寂漠として其れ人無し)に「林沢空虚、罕有民也」(林沢空虚にして、罕に民有るなり)と注するのも、それぞれ皆、王逸なりの「楚辞」の読み方である。

古代の散文に目を移せば、まず「論語」⁽¹²⁾先進篇に「屢々空し」と見える「空」は、毛伝の言う「窮」と解してよいであろう。戦国諸子百家の言の中にも、幾つかの例が見出だされる。例えば「孟子」⁽¹³⁾尽心篇に「不信仁賢、則国空虚」(仁賢を信ぜざれば則ち国空虚たらん)、また、「莊子」⁽¹⁴⁾徐無鬼篇に「夫逃虚空者、聞人之足音蹙然而喜矣」(夫れ虚空に逃るる者は、人の足音の恐然たるを聞いて喜ぶ)と見える。この「莊子」の文は、「空」の意が、決して毛伝の言う「大也」に尽くされぬことを示すであろう。「虚空」とは、寂しくひたすらに「音」(響き)を待っている空間なのである。「韓非子」には、「孟子」に見えた「空虚」の語が二、三使われているが、特に注目されるのは、同書喻老篇中の次の一文である。

空窳者、神明之戸牖也、

空窳なる者は、神明の戸牖なり

「窳」は「穴」、「牖」は「窓」、「神明」は「精神」の謂である。江戸・太田全斎「韓非子翼義」⁽¹⁵⁾は、「空窳は耳目鼻口

を謂うなり」と注している。

当然のことながら、我々はここで、顔に穴をあけられて死んだ渾沌（＝混沌）のことを思い出すであろう。話は「莊子」応帝王篇にある。

人皆有七竅、以視聽食息、此独無有、嘗試鑿之、日鑿一竅、七日而渾沌死、

人には皆七つの竅有り、以て視、聴き、食い、息す。此れ（渾沌）独り有ること無し。嘗試にこれを鑿たん。日に一竅を鑿つ。七日にして渾沌死せり。

渾沌を殺したのは「儻」と「忽」、即ち「人間の束の間の生命を象徴するかのとき存在」である。¹⁶ この莊子の寓話から考えれば、「空」とは、渾沌に鑿たれた穴のことである。更に「韓非子」喻老篇の言を考え合わすと、人間の精神は、渾沌の死を代償にして得られたものである。

漢

漢代の散文では、前漢・司馬遷「史記」に「空言」の語が見える他、前漢・桓寬「塩鉄論」¹⁷ 輕重第十四に「国家衰耗、城郭空虚」、後漢・班固「漢書」¹⁸ に「空自苦」（空しく自ら苦しむ。楊雄伝）、「辺地既空虚」（匈奴伝）等の例が見うけられる。

次に、漢代詩歌における「空」を、「全漢詩索引」¹⁹ によって調べてみよう。全部で十八例が見出だされるが、うち「胡笳十八拍」中の四例は、後代の作と考えられるので、考察の対象から除外してよからう。例えば、「不得相随兮空断腸」（相隨うことを得ずして、空しく断腸す）の如き言いまわしは、やはり唐代のものであろう。それ以外の例の中で、九例は「空○」の型を取り、○の部分には、場所を示す語が入る。（空床、空房、空城、空舎、空廬、空階、空室）こ

の内、八例は、家屋内の場所を指し、「空城」のみがそうでない。その他、「空」を副詞として使ったもの三例（空往空返、空驅驅、空峙ちぢよ）、「空桑」一例、「空令」（空しくしせしむ）一例である。右に挙げた諸例の中、自然に係わるものは、「香風離久居、空令、蕙草残」（香風 久しく居り難し。空しく蕙草をして残せしむ。古詩四首の二）一例のみであり、しかもこの古詩は、その言辞から見て、六朝時代の作である可能性が大きい。漢代では、「空」は自然を描く時にはほとんど使われなかった。

魏・晋

魏の阮瑀げんう「駕出北郭門行」や曹植「雜詩」に「空室」の語が見えるのは、漢代詩歌の延長上にある。続く晋代において「空」は新たな展開を示す。その一は、「空」が「空」（天空）の意として用いられ始めたことである。例えば、陸機の「班婕妤」に、

黄昏履綦絶

黄昏 履綦（靴の飾り）絶え

愁来空雨面

愁来 空雨（空一面にひろがる雨）面す

また、王喬之の「奉和慧遠遊廬山」（慧遠の廬山に遊ぶに和し奉る）に、

衆阜平寥廓

衆阜（おか） 平らかにして寥廓（がらんと広い）たり

一岫独凌空

一岫（みね） 独り空を凌ぐ（空にとび出ている）

その二は、老荘的な「無」が「空無」として詩の中に現われてきたことである。（「無」が「空」と結合したことについては、仏教からの影響を考える必要があるかも知れない。）例えば、陶淵明「帰園田居」（園田の居に帰る）五首の四に、

人生似幻化

人生は幻化に似たり

終当歸空無 終に当に空無に歸すべし

また、支遁の「詠懷詩」五首の二に、

廓矣千載事 廓たるかな 千載の事

消液歸空無 消液（融けて水となる）して空無に歸す

その三。陶淵明は、「空」の副詞的な用法に於て、新しい傾向を詩にもたらした。例えば、「庚子歳五月中、從都還、阻風於規林」（庚子の歳五月中に、都より還り、風に規林に阻まる）二首の一に、

延目識南嶺 目を延して南嶺を識る

空歎將焉如 空しく歎く 將た焉にか如かん

また、「九日閑居」に

如何蓬廬士 如何ぞ 蓬廬の士（隱遁者）

空視時運傾 空しく時運の傾くを視る

それをして無駄なことが分っているのに、他にどうしようもなく、その行為を続けている、という個人的な感慨を、「空」が表わしている。ずっと後のことだが、中唐の呂温はこの感慨を、「経河源軍郵作」（河源の軍郵を経て作る）において、

有心無力復何言 心有りて力無し 復た何をか言わんや

（全唐詩卷三七二）

と述べている。

このような「空」と似た表現に「空自」がある。「空自」は散文では、「漢書」楊雄伝に既に見えていたが、晋代で

は、葛洪の「抱朴子」⁽²¹⁾内篇勸求に、「空自焦愁、無益於事」(空しく自ら焦愁するは、事に益無し)と見える。これを詩に取り入れたのは、やはり陶淵明が最も早いであろう。⁽²²⁾その詩「己酉歳九月九日」に、

蔓草不復榮 蔓草 復た榮えず

園木空自凋 園木 空しく自ら凋む

陶淵明の「空自」は、自らの力ではどうしようもなく、じっと耐え忍んで、時の過ぎゆくのを待つのである。「不復(榮)」は、いわば「必然」であろう。必然を前にして、生き物は、ただひたすらに「空自」するしかない。

次に、晋代の「空」のその四に移る。陸沖の「雜詩」二首の一に、

空谷回悲響 空谷 悲響を回らせ

流風漂哀音 流風 哀音を漂わす

とある。「莊子」徐無鬼篇の「虚空」に於ける「音」については、既に指摘した。そして今、「詩経」から受けつがれた「空谷」に、「悲響」がつけ加わった。莊子の「足音」、そして陸沖の「響き」。「空間」は、それ自らは、がらんどうで、無声無音であるが、音を呼び込み、抱え込んで、内部で反響させる、特異な空間である。しかもその響き声は、人に人間へのなつかしさを思い出させる悲しい音色をしている。

以上、晋代の「空」について四点にわたって述べた。要するに、逆説的な言い方になるが、晋代において「空」の内容がとても豊かになったのである。

宋・齊

宋代では我々は、まず謝靈運を、次に鮑照^{ほうしやう}を検討しなくてはならない。謝靈運は、「空言」(もと司馬遷の言)を詩

に取り入れた。また、「過瞿溪山飯僧」(瞿溪山に過りて僧に飯す)には、

清霄颺浮烟 清霄(青空) 浮烟がま颺り

空林響法鼓 空林 法鼓響く

とあり、「空谷」の「悲響」との関連を思わせる。「空」なる「林」は、ここでは、「悲響」ではなく、「法鼓」という宗教的な法悦の音を響かせる。(「空林響法鼓」は、当然王維「鹿柴」の典故の一に加えなければならぬ。)これと関連するものに、鮑照「採菱歌」七首の五の、

空抱琴中悲 空しく琴中を抱いて悲しむ

*「中」樂府詩集卷五二作「心」。

の一句がある。「琴中」にあるのは「悲響」である。その中は、小規模ながら「空(洞)」である。「琴中」という「空(間)」が、「悲響」を呼ぶのである。その琴を「空しく抱く」とはどういうことか。一つの「悲しく響く空(洞)」を胸の内に持つことが、他でもなく「空し」なのであろうか。もしそうならば、「空抱琴」(空しく琴を抱く)は、「抱空琴」(空琴を抱く)と同意ということになる。同じく鮑照の「擬院公夜中不能寐」(院公の夜中寐ぬること能わずに擬す)には、

佇立為誰久 佇立(たたずむこと) 誰が為ためにか久しき

寂寞空自愁 寂寞として 空しく自ら愁う

とある。自らを責めるようにして愁えるが、いつまで愁えても、どうしようもない。自ら愁えることによって、ますます「空しさ」がひろがる。「空自」の「空」は、動作の結果にもなっている。「空」は実に、品詞の性格を越えて、

文法的に浮遊する存在だと言えよう。

なお、「空自」に似たものに「空相」がある。宋代民歌「読曲歌」八十九首の十五に、

誰能空相憶 誰か能く空しく相憶いて

独眠度三陽 独り眠りて三陽(春の三日月)を度らんや

「相」は憶う対象(相手)を指し、「相憶」は「空し」の状態を解消しようとする行為である。それが「空しく」とは、無駄とわかっていて、なお空しさを解消せんと努力するということであろう。相手がある故に、いっそう「空し」の気持は強いと言える。これに対して、「空自」は、もっぱら深く内向する「空し」である。

宋の次は齊である。齊の劉繪の「有所思」(思う所有り)には、

佳人不相見 佳人 相見えず

明月空在帷 明月 空しく帷(カーテン)に在り

とあり、「不相」(相くせず)の状態が「空」であることを示している。恐らくこの頃に、「相」と「空」とが補完しあう関係をもつに到ったのであろう。

梁

齊の次は梁である。茫雲の「貽何秀才」(何秀才に貽る)に、

臨花空相望 花に臨んで 空しく相望み

対酒不能歌 酒に対して 歌うこと能わず

がある。何遜の「春夕早泊、和劉諮議落日望水」(春夕早に泊り、劉諮議(官名)の落日に水を望むに和す)には、

客心自有緒 客心 自ずと緒有り(起りはじめる)

对此空復愁 此れに対して 空しく復た愁う

がある。「空復」は「空自」に通じ、空しい行為のいつまでも繰り返されることを言う。「空」はここでは「自」と対応している。「自」という必然に出会って、「空」はただ無力な様を言う。(詩の表現史から言えば、まず「空自」があり、その次に「空」と「自」の対応関係が現われた。) 吳均の「与柳惲相贈答」(柳惲と相贈答す) 六首の二には、

故人不可棄 故人 棄つ可からず

新知空復何 新知 空しく復た何んぞ

がある。「旧友を棄て去ることは許されない。新しい友人をいったいどうすればよいのか」(男女のことを言う)の意である。根本的な原因(「不可」で表わされる)ある故の「空復」なのである。「自」といい、「不可」といい、どちらも「空」に対して攻勢的である。その点で、「自」や「不可」は文法的に凸とつの性質を持ち、逆に「空」は、ただ受動的であるに過ぎないので、凹おちの性質を持つと言うことが出来る。

吳均の「答柳惲」(柳惲に答う)には、更に、

一見終無縁 一見 終に縁(方法) 無く

懷悲空満目 懷悲 空しく目を満たす

がある。「ただの一度さえ会うに方法が無く、悲しみが胸いっぱいいっぱいに満ちて、目頭が熱くなる」というのである。「空満」は明らかに反語的である。目に何も映らない空しさが、胸の内に空虚を生み、その空虚を悲しみが満たす。「空」は、空洞である。たとえそれが副詞的用法であっても、結果的には空洞を生む。「空」という凹おちの性質をもった空間

である以上、何かあるものによって、満たされやすい。それは、一種の、無防備状態の空間なのである。先に挙げた陶弘景「寒夜怨」の「空山霜滿高煙平」にも同じようなことが言える。「空」山を霜が「滿」たす。しかし、いくら霜が満ちても、「空山」は「空山」である。

梁詩の検討を続ける。庾肩吾「九日侍宴樂遊苑應令」（九日樂遊苑に侍宴し應令す）では、

葉破柳條空　　葉破れて柳條空し

*「葉破」文苑英華卷一七三「一作破葉」。

とあり、「破」の後に「空」が現われ、同「西城門死」では、

零落竟同歸　　零落して竟ついにに同歸（死ぬこと）し

憂思空相結　　憂思　空しく相結ぶ

というように、「零落」の後に「空相」が来る。鮑泉の「寒闈」には、

行人消息斷　　行人　消息断え

空闈静復寒　　空闈　静かにして復た寒し

と見え、「断」の後に「空」なる状態が来る。以上三首における「空」は、日常の延長上に在る「空」ではなく、ある致命的な判断（破、落、断）が下った後の、非日常的な、特異な「空」である。

北　朝

ここで北朝に眼を向ければ、北齊・祖珽の「挽歌」には、

榮華与歌笑　　榮華と歌笑と

万事尽成空 万事 尽ことごとく空と成る

という、仏教的な「空」が見え、北遷後の庾信（北周）には、「伏聞遊獵」（伏して遊獵を聞く）の、

聞弦鳥自落 弦を聞けば 鳥自ら落ち

望火獸空驚 火を望めば 獸空しく驚く

や、同「擬詠懷」二十七首の三の、

自憐才智尽 自ら才智の尽つくるを憐み

空傷年鬢秋 空しく年鬢の秋なるを傷む

の如く、「自」「空」の対応が見られる。「自」は「自分の方から」「自分自身で」の意を持ち、「空」は「他にどうしようもなく、受動的に」の意を持つ。また、ここでも「落」「尽」の後に「空」の来ているのが注目される。庾信は詩において「空」をよく使うが、それらの多くは、右に引いた「擬詠懷」や、また「寄徐陵」（徐陵に寄す）の、

莫待山陽路 待つ莫なかれ 山陽の路に

空聞吹笛悲 空しく吹笛を聞きて悲しむを

のように、「悲しみとしての空」である。

陳・隋

六朝末の陳・隋になると、「空」は更に多く用いられるようになる。まず、「空自」が自然の描写にしばしば用いられる。陳・陰鏗こうの「行經古墓」（行きて古墓を經ふ）に、

懸劍今何在 懸劍 今 何いづくにか在る

風楊空自吟 風楊 空しく自ら吟ず

陳後主「同管記陸琛七夕五韻」(管記陸琛の七夕五韻に同ず)に、

含笑不終夜 笑いを含んで 夜を終えず

香風空自停 香風 空しく自ら停まる

隋・楊素「贈薛内史」(薛内史に贈る)に、

明月徒流光 明月 徒らに光を流し

落花空自芳 落花 空しく自ら芳し

「空自」は、陶淵明や鮑照の例とは異なり、ひとつの美意識の表明となりつつある。また、「空」は、何らかの否定的概念と共に出てくることが多くなる。例えば、陳・陳暄「紫駟馬」に、

笳寒芳樹歇 笳寒くして 芳樹歇き

笛怨柳枝空 笛怨みて 柳枝空し。

また、隋・元行恭「過故宅」(故宅に過る)に、

草深斜徑滅 草深くして 斜徑滅し

水尽曲池空 水尽きて 曲池空し

また、隋・煬帝「夏日臨江」(夏日 江に臨む)に、

日落滄江靜 日落ちて 滄江靜かなり

雲散遠山空 雲散って 遠山空し

既に梁代にも見られたことなのであるが、「空」は、何か、存在（右の例では全て自然物である）にとって取り返しのかね出来事が起こってしまった後の、空間の存在様態、又は空間の質を言う。六朝末では、むしろそこに美を、おそらくは超俗的な美を認めているようである。

この他、陳・徐陵には、「空自」の逆転した「自空」の用例がある。その「内園逐涼」（内園にて涼を逐う）に、

狭径長無跡 狭径 長えに跡無く

茅齋本自空 茅齋 本もと自おのずから空し

「自空」は「元々それ自身の内に、空なる性質をもっている」の意で、晋・鳩摩羅什訳「維摩經」⁽²³⁾に、「色即是空、非色滅空、色性自空」（色は即ち是れ空なり。色滅して空となるに非ず。色性は自ずと空なり）とあるのに基づくであろう。

さて、最後に隋・薛道衡の「重酬楊僕射山亭」（重ねて楊僕射の山亭に酬ゆ）に、

空庭聊歩月 空庭 聊か月に歩み

閑坐独臨風 閑坐して 独り風に臨む

やはり隋の弘執恭「秋池一株蓮」（秋池一株の蓮）に、

秋至皆空落 秋至って 皆空しく落ち

凌波独吐紅 波をしの凌いで 独り紅を吐く

*「空」文苑英華卷三三三作「虚」。

とある。「空」の中の「月」や「紅」が、美しいものとして、観賞の対象になっている。それはまた、同時に「空」自体もひとつの対象として賞ではじめられていることでもある。

補足——詞性

ここで補足として、唐以前の詩での、「空」の詞性(品詞としての性格)について、まとめておこう。「空」は大別して、(一)名詞、(二)副詞的用法のもの、(三)述語となるもの(動詞又は形容詞)、(四)形容詞で名詞修飾語となるもの、の四類となる。各類の代表的な例を左に記す。

(一) 名詞としての「空」

。一岫独凌空　。万事尽成空　。終当帰空無

(二) 副詞としての「空」

。空視時運傾　。寂漠空自愁　。空抱琴中悲

(三) 述語としての「空」

。不宜空我師(動詞)　。葉破柳条空(形容詞)　。水尽曲水空(形容詞)

(四) 名詞修飾語としての「空」

。空山啼夜猿　。空庭聊歩月　。封雪満空枝

少なくとも唐以前の詩では、「空」の詞性は、その現われ方において複雑なものではない。問題は、(一)(二)(三)(四)の「空」を、同じものの単なる現われ方の違いと見るか、或いは、一応それぞれ別個のものに見なすかである。(一)の「空」は、ひとまず別個のものとしよう。思想的な意味の付与されたものか、または「そら」を指すものであるか。 (二)の形容詞と(四)は互換性があり、「山空」と「空山」とは、ほとんど同義と考えられる。(二)と(三)(四)の「空」の間に、共通項を認めうるかどうか、問題として残る。(二)と(四)、または(二)と(三)の間に流動性の認められる例のあることについて

ては、既に宋・齊の項で述べた。

三 唐詩の「空」

「空」は唐詩において、量的のみならず質的にも大きな発展を遂げた。次に、幾つかの項目に分けて、重要だと思われる問題を検討してみよう。

「自」と「空」

「自」と「空」との関係は、六朝詩において既に若干見られたが、唐に入って、両者は更に密接なかかわりをもつようになった。まず例を引く。王維の「奉寄韋太守陟」(韋太守陟に寄せ奉る)に、

荒城自蕭索 荒城 自ずと蕭索(ものさびしいさま)たり

万里山河空 万里 山河 空し

(全唐詩卷一二五)

盛唐・丁仙芝の「長寧公主旧山池」に、

庭閒花自落 庭閒しずかにして 花自ずと落ち

門閉水空流 門閉じて 水空しく流る

(全唐詩卷一一四)

劉長卿の「使次安陸、寄友人」(使いて安陸に次り、友人に寄す)に、

孤城尽日空花落 孤城尽日(終日) 空しく花落ち

三戸無人自鳥啼 三戸人無く 自ら鳥啼く

(全唐詩卷一五一)

中唐・盧綸の「春江夕望」に、

経難人空老 難を経て 人空しく老い

逢春雁自飛 春に逢いて 雁自ら飛ぶ

(全唐詩卷二八〇)

同・楊衡の「経趙処士居」(趙処士の居を経)に、

有地水空緑 地有りて 水空しく緑なり

無人山自青 人無くして 山自ら青し

(全唐詩卷四五一)

最後の楊衡の例に顕著なように、「空」は「有」(存在)の反対概念であり、内部に窪みを有した空間である。これを凹空間と呼ぶ。これに対して、「自」は「無」(非存在)の反対概念であり、自己の存在を明確に主張する、内部にかなる窪みをも含まない空間である。これを凸空間と呼ぶ。唐詩では、凹空間「空」が普遍性を獲得するのと共に、凸空間「自」が、あたかも平衡感覚を働かせたかのように、「空」に対立(対応?)してくる。「自」は、「空(無)」の中にあつての「有」の自己主張である。しかもこの「有」は自然(物)であることが多く、稀まれに人である。そして、時には運動により(啼、飛、落)、時には色彩(青)により自己の存在を誇示する。右の王維の詩では、「山河」に広がった「空」の中で、「荒城」のみが「蕭索」として横たわる。「自」は、「荒城」を凸空間として把えた。同時にまた、「自」は、その凸空間を「蕭索」と感じる「自己」でもある。「自」は、「空」の中に投影された「自己」の姿ではあるまいか。

「空自」も、唐詩人のよく使う所である。

盛唐・李白の「送別」に、

雲帆望遠不相見 雲帆望遠するも 相見えず

日暮長江空自流 日暮長江 空しく自ら流る

(全唐詩卷一七六)

王維の「終南別業」に、

興来毎独往 興来たれば 毎つねに独り往き

勝事空自知 勝事 空しく自ら知る

(全唐詩卷一二六)

*国秀集卷中詩題「初至山中」、「空」作「祇」。

また、盛唐・李頎の「題綦母校書別業」(綦母校書の別業に題す)に、

万物我何有 万物 我何をか有せん

白雲空自幽 白雲 空しく自ら幽なり

(全唐詩卷一三二)

「空自」では、「空」と「自」が対立するのではなく、融合している。例えば、「日暮長江」に出現した「空」の中を「長江」が自己を実現しつつ流れてゆく。「白雲」は、「空」の山中で、奥深く浮かび自己を実現している。「勝事」(すばらしい風景)は、「空」の凹空間に於て出現する。それを自ら知覚し、その凹空間において自己は勝事と一体化する。やはり自己の実現である。「空」の凹空間において、他の何ものとも対立することなく、自己実現を遂げる。これが「空自」であり、その際に、「自己」は、詩人であっても、自然であっても大差はない。詩の奥に潜む「自己」である。

初唐・裴耀卿の「敬酬張九齡当塗界留贈之作」(敬いて張九齡当塗界の留贈せらるるに酬いる作)には、「離憂空自情」(離憂空しく自ら情あり)とあり、王維の「待儲光羲不至」(儲光羲を待つも至らず)に「臨堂空復情」(堂に臨みて空しく復た情あり)とある。「空自情」は「空復情」と同じく、「空」によってもたらされた感情が、いつまでも去らぬことを

言う。(また別種の自己実現と言うべきか)。「情」について言えば、例えば盛唐・王適の「古離別」に「夜還羅帳空有情」(夜 羅帳に還れば 空しく情有り)等とある如く、「空」との関連を強く予測させるが、本稿ではまだこれを論じる準備が出来ていない。

「落」と「満」

初唐・王績の「詠懷」に、

日落西山暮 日落ちて 西山暮れ

方知天下空 方に知る 天下の空なるを

(全唐詩卷三七)

とあって、「落」の後に「空」が知覚されることを明言している。この「落」から「空」へという型は、唐詩にずいぶん多い。幾首か拾い上げてみると、まず王維の「鳥鳴澗」に、

人間桂花落 人間 桂花落ち

夜静春山空 夜静かにして 春山空し

(全唐詩卷二二八)

劉長卿の「登松江駢樓、北望故園」(松江の駢樓に登りて、北のかた故園を望む)に、

平蕪万里無人去 平蕪(平原)万里 人の去る無く

落日千山空鳥飛 落日千山 空しく鳥飛ぶ

(全唐詩卷一五一)

盛唐・張謂の「邵陵作」(邵陵にて作る)に、

白蘋春尽花空落 白蘋春尽き 花空しく落つ

遙望零陵見旧丘 遙かに零陵を望み 旧丘を見る

(全唐詩卷一九七)

また、中唐・韋応物の「秋夜寄丘二十二員外」（秋夜に丘二十二員外に寄す）に、

山空松子落　山空しくして　松子落つ

幽人応未眠　幽人　応まさに未だ眠らざるべし

（全唐詩卷一八八）

右、韋応物の例では、「空」から「落」へという方向になっているが、「落」によって「空」がいつそう深く自覚されるのであるから、「落」から「空」へと置きかえることができる。また、張謂の詩では、「花落」ちて「空」しの状態になっているので、やはり「落」から「空」への型に含めてよいであろう。いずれにせよ、詩の中で「落」は「空」を招く働きをしている。（「落」と同じように「空」を招くものに、「尽」「去」「絶」「断」などがあるが、本稿ではこれらの語に詳しく言及する余裕がない。）

さて、例えば「落」によって招来された「空」は、既に六朝・梁の所で見た如く、他の何ものかによって満たされやすい存在である。かくて「空」は、「満」の語をその前後に伴うことがよくある。初唐・駱賓王の「辺夜有懐」（辺夜に懐い有り）には、

古戍煙塵満　古戍　煙塵　満ち

辺庭人事空　辺庭　人事　空し

（全唐詩卷七九）

盛唐・祖詠（一作李端）の「中峯居、喜見苗発」（中峯の居にて、苗発を見るを喜ぶ）には、

高窓不可望　高窓　望む可からず

星月満空山　星月　空山に満つ

（全唐詩卷一三一）

同・儲光羲の「使過彈箏峽作」（使つかいして彈箏峽に過ぎりて作る）には、

原田無遺粟 原田 遺粟無く

日暮満空城 日暮 空城に満つ

(全唐詩卷二三六)

同・高適の「陪竇侍御、泛靈雲池」(竇侍御に陪したがいて、靈雲池に泛うかぶ)には、

夕陽連積水 夕陽 積水に連なり

辺色満秋空 辺色 秋空に満つ

(全唐詩卷二二四)

劉長卿の「過裴舍人故居」(裴舍人の故居に過よる)には、

慘慘天寒独掩扇 慘慘として天寒く 独り扇かんぬきを掩う

紛紛黄葉満空庭 紛紛として黄葉 空庭に満つ

(全唐詩卷二五一)

* 文苑英華卷三〇七「掩」作「閉」、「満」作「落」。

等とある。更にまた、「落」と「満」の両者を伴った「空」も見られる。韋応物の「寄全椒山中道士」(全椒山中道士に寄す)に、

落葉満空山 落葉 空山に満つ

何処尋行跡 何の処いづれところにか 行跡を尋ねん

(全唐詩卷一八八)

* 「満」文苑英華卷二三八作「遍」。

また、中唐・元稹の「野狐泉柳林」に、

秋来寥落驚風雨 秋来寥落 風雨に驚く

葉満空林踏作泥 葉は空林に満ち 踏みて泥と作なる

(全唐詩卷四一一)

と見える。元稹にはまた、五言律詩「南家桃」（南家の桃）の後半四句に、次のようにある。

離人自有経時別 離人 自ずと時を経し別れ有り

眼前落花心歎息 眼前 落花 心歎息す

更待明年花満枝 更に待たん 明年 花 枝に満つるを

一年迢遞空相憶 一年迢遞ちようてい（はるかなさま） 空しく相憶う

（全唐詩卷四二二）

眼前に「落」花を見て、現在は「空」なる状態にある。この「空」を断つべく「相」憶っているが、それは今はかなわぬことである。この「空」は、明年「満」たされることがあるか。それにしても、それまでの何とはるかなことか。「落」「満」「相」は、「空」を中心にして、互いにつながりあっている。

*「相」が「空」を解消しようとする行為を示す語であることは、六朝・宋齊の所で簡単に触れた。本稿では「相」についてこれ以上言及しない。後日別の機会に詳しく考察したい。

「自」はどうであろうか。この詩では、「落」以前の状態を指し示している。以前と雖も、「別」れを経ているのでやはり「空」の時にはちがいがなかった。従って、「自」は、「自空」（自ずと空し）の意を持つであろう。その「空」が、「落花」によって新たに自覚されるのである。元稹の友人白居易の「聞庾七左降、因詠所懷」（庾七の左降せらるるを聞き、因りて懷まう所を詠む）に、「中懷須すべらく自ずと空なるべし」の句がある（全唐詩卷四二九）のも、全くの偶然ではないであろう。

「急」と「殺」

私は以前から、唐詩の「急」と「殺」の解釈について、いつも釈然としない思いを抱いてきたが、今回これを「空」

との関連において、理解できるのではないか、と思いついた。そこで、次にこの二語について考える。

「急」は、緊迫、危急、急速などの意で用いられ、音楽の節まわしとしても使われる（急絃、急節など）。せっぱつまって、危い程までに速くなってくる、というのが根本的な意味であろう。この語は、「詩経」以来、詩の中でも用いられて来たが、唐詩での用例は、決して多くはない。しかし、用いられる時には、特に印象的な箇所でも用いられるように思われる。その少ない中から、例を挙げてみる。まず盛唐・王昌齡の「和振上人秋夜懷士会」（振上人の秋夜に士会を懷うに和す）に、

郭外秋声急 郭外 秋声 急なり

城辺月色残 城辺 月色 残る

（全唐詩卷一四二）

同・常建の「高楼夜彈箏」（高楼にて夜箏を弾く）に

山高猿狖急 山高くして 猿狖（さる）急なり

天静鴻雁鳴 天静かにして 鴻雁鳴く

（全唐詩卷一四四）

李白「秋夜宿龍門香山寺（長いので以下略す）」（秋夜に龍門の香山寺に宿る）に、

水寒夕波急 水寒くして 夕波急なり

木落秋山空 木落ちて 秋山空し

（全唐詩卷一七二）

盛唐・沈頌の「送人還吳」（人の呉に還るを送る）に、

征帆暮風急 征帆 暮風 急なり

望望空延首 望望 空しく首を延ばす

（全唐詩卷二〇二）

韋応物の「滁州西澗」に、

春潮帶雨晚來急 春潮雨を帶び 晚來急なり

野渡無人舟自橫 野渡 人無く 舟おのずか自ら横たわる

(全唐詩卷一九三)

晚唐・杜牧の「冬日五湖館水亭懷別」(冬日 五湖館の水亭にて別れを懷う)に、

江城向晚西流急 江城晚なんなんに向として 西流急なり

無限鄉心聞擣衣 無限の郷心 擣衣を聞く

(全唐詩卷五二五)

* 文苑英華卷二九八「西流」一作「東風」、「無限郷心」一作「一半郷愁」。

右六例、季節は春と秋に分かれるが、一日の時間帯は、全て夜または夕刻である。李白と沈頌では「急」は「空」と共に使用されている。韋応物では、「無人」を「空」に読みかえることができる。また、杜牧では、「無限」が「空虚な空間を何か代わりに満たす」意味をもつことは、私のかつて述べた所である(後述)。以上のことから、私は「急」について次のように考える。「急」は、「空」なる空間に向って吹く所の、文法的な「風」である。或いはまた、その「風」が人間の心と呼びおこす心のざわめきである。言い換えれば、「急」とは、「空」を間近まぢかにした人間の心の状態——何か不安なものの到来を予知した心のおののきである。もう一つ例を補っておく。

中唐・李益の「奉酬崔員外副使携琴宿使院見示」(崔員外副使の、琴を携えて使院に宿し、示さるるに酬い奉る)に、

庭木已衰空月亮 庭木已に衰え 空しく月亮あきらかなり

城砧自急对霜繁 城砧自ずと急に 霜の繁きに対す

(全唐詩卷二八三)

「自急」は、きぬたの音であるとともに、「空」の訪れを目前にした人間の胸の高鳴りである。「自」(「空」とも対

応している)の存在がそのことを証している。

次に「殺」をここに持ち出せば、人は或いは牽強付会だと言うかも知れない。江戸・三浦晋(梅園)の「詩鞞」巻六雑記には「咲殺」「愁殺」の「殺」について、「殺の意ハナシ。チトツヨク咲フ、愁フ也」と述べ、釈大典「詩家推敲」は、「殺ハ害也ト訓ズ」「本義ヨリ転ジテ助語トナル」「殺ハツヨクイフ助語ナリ」と記しているように、動詞に付く「殺」は、唐詩においても、普通、せいぜい強めの意程度にしか考えられていない。しかしながら、私には、唐詩の中の「殺」は、明らかにある一つの方向性をもった語であるように思われる。例えば、初唐・劉希夷の「帰山」には、

日暮松声合 日暮 松声合し

空歌思殺人 空しく歌えば 人をして思殺せしむ

(全唐詩卷八二)

とある。また、高適の「薊門行」五首の四には、

古樹滿空塞 古樹 空塞に満ち

黄雲愁殺人 黄雲 人を愁殺す

(全唐詩卷二二)

岑参の「題苜蓿峯寄家人」(苜蓿峯に題して家人に寄す)には、

閨中只是空相憶 閨中只だ是れ 空しく相憶うのみならん

不見沙場愁殺人 見ずや 沙場 人を愁殺するを

(全唐詩卷二〇二)

とある。この他にも、「空」と「殺」が組になったものは、数多い。これらの「殺」は、「空」が人に呼び起こす感情を示している。それは、人の心を「害」する程にまで強い衝撃である。更に「殺」は必ずしも「空」を伴わなく

ても、やはり同じ意味を保持し続ける。例えば、李白の「陪侍郎叔遊洞庭醉後」(侍郎叔に陪ともないて洞庭に遊び、酔いて後)三首の三に、

巴陵無限酒 巴陵 無限の酒

醉殺洞庭秋 醉殺す 洞庭の秋

(全唐詩卷一七九)

とあるのは、自ら心の中に空虚さを持つ故に(「無限」の語に注意せよ)「醉殺」(酔いつぶれる)するのである。また、晩唐・李遠の「黃陵廟詞」に、

輕舟小楫唱歌去 輕舟小楫しゅう(かじ) 唱歌し去り

水遠山長愁殺人 水遠く山長くして 人を愁殺す

(全唐詩卷五一九)

とあるのも、「去」によって「空」が作者の心に喚起され、それで作者は「愁殺」させられるものと考えられる。中唐・李賀の「秋涼詩、寄正字十二兄」(秋涼詩、正字〔官名〕十二兄に寄す)に、

大野生素空 大野 素空(秋空) 生じ

天地曠肅殺 天地 曠として肅殺す

(全唐詩卷三九二)

秋空の下、天地の万物が衰えてゆく。「肅殺」は、単なる自然の描写ではなく、「空」が作者の心へ投げかけた影でもある。

「急」と「殺」は、以上に述べたように、「空」が「人の心」に及ぼす作用を、端的に表わした語である、と私は考える。

「不在」の文法と「空」

ここで、私が以前に述べた「不在」の文法と「空」との関係を再吟味する必要がある。²⁶

「連」は、「時間的・空間的に広がり、おおいつくしてゆく²⁷」という意味を持つ場合、「空」との関連を十分に予測させる。即ち、「空」が前提されているが故にこそ、「連」のひろがりが可能なのである。一例を挙げれば、祖詠「望薊門」(薊門を望む)の、

沙場烽火連胡月 沙場の烽火 胡月に連なる

(全唐詩卷一三一)

では、「沙場」は既に「空」の概念を含んでいる。

「在」は多く、「不在」を強く意識した上での「在」の肯定であり、「不在」の意識は、時に「在」と「空」の対句的用法を通して現われる。「在」は、「かつて存在したものが、今はもうどこにも無い、存在しない」という意味での「空」と密接な関係をもつ。

「欲」は、「消滅・滅亡への傾斜」を示すものが、「空」の状態へ向かいつつある、との意味合いに於て、「空」とかわる。

「不勝」については、前論文で、「空自」と文法的に等価であると述べた。²⁸ 本稿では、私は「空自」を「空」の凹空間において、他の何ものとも対立することなく、自己実現を遂げる²⁹と規定した。それ故に、例えば「不勝愁」とは、「空自愁」の意であり、それは即ち「空」の中で、ただひとり自らいつまでも愁えている「姿、愁い続けること」でしか自己実現のできぬ姿である。

「無限」は、「本来在るべきもの(又は人)の不在によって生じた空虚な空間を、何か別のものが代って^{おまな}遍く埋め

「空³⁰」という意味をもつ。「空虚な空間」とは、もちろん「空」のことである。「無限」も「空」を前提とした語である。

「斜」と「花」については、問題は単純ではない。ただ、「斜」が、本来空間概念を含んでいることは確かである。そしてまた、「玉篇」に言うように、それが「不正也」ならば、そこに何らかの隙間^{すきま}、すなわち「空」の存在する余地がある。これを逆転させて、「空」であるので「斜」が現われると言い切れるかどうか。私にはまだ明らかでない^{補注}。ただ、李商隱の「落花」では、明らかに「落」「去」のあとに「空」が（文字としては見えていないが）出現している。そして「連」も「斜（暉）」も、その隠れた「空」の下で姿をあらわしている。

「花」と「空」の関連については、後に少し違った観点から、これを取り上げてみたい。以上吟味したように、私が前論文で、その間に「不在」の湾曲をもつ文法が成立している³¹と推定した諸語は、元をただせば、皆「空」との関係に於て存立しているものである。従って、「不在」の湾曲とは、「空」を中心とした球面（それが十全な球面となるかどうかは、まだ必ずしも明らかではないが）上の、一曲面・一領域（その全体に占める位置は決して小さくはないであろう）のことである、と言い変えることができる。

「空」の詞性

唐詩以前の「空」の詞性については、既に述べた。唐詩の「空」の詞性についても、基本的にはこれと変りはない。今までに引いた例から各詞性のものを一例ずつ挙げておく。

(一) 名詞 大野生素空（李賀）

(二) 副詞 望望空延首（沈頌）

(三) 述語(動詞) 潭影空人心(常建)

(形容詞) 夜静春山空(王維)

(四) 形容詞(名詞修飾) 古樹満空塞(高適)

右のうち常建の「潭影 人心を空しくす」は未出。「題破山寺後禪院」(全唐詩卷二四四「破山寺後禪院に題す」)中の一句である。(一)から(四)までの、各々の句に於ける詞性は、はっきりしているが、ここでも問題は、各品詞間に共通性や互換性があるかどうかである。

(一)名詞では、「空」の意の場合でも、「空し」の意を含むであろう。また、李白「怨歌行」には、

世事徒為空 世事徒らに空と為る

(全唐詩卷一六四)

とあるのに対し、駱賓王「辺夜有懐」には、

辺庭人事空 辺庭 人事空し

(全唐詩卷七九)

と見える。これは、「空しさ」「空虚」の意の名詞は、容易に形容詞となりうることを示している。

(二)の副詞については、更に流動性に富むものと考えられる。劉長卿「使次安陸、寄友人」(使いて安陸に次り、友人に寄す)に、

孤城尽日空花落 孤城尽日 空しく花落ち

三戸無人自鳥啼 三戸人無く 自ずと鳥啼く

(全唐詩卷一五一)

とある。「空」は「自」と同じく副詞として作用するが、すぐにでも「空花」と形容詞化することも可能である。また、同じく劉長卿の五言律詩「登松江駅楼、北望故園」(松江の駅楼に登り、北のかた故園を望む)にも、

平蕪万里無人去 平蕪万里 人の去る無く

落日千山空鳥飛 落日千山 空しく鳥飛ぶ

(全唐詩卷一五一)

とあるように、「空」は平仄や対句の都合で、その位置を容易に動かし得る。要するに、副詞としての「空」は文法的に軽い存在であると言ってもよいであろう。軽いということは、同時に流動性、互換性に富むということでもある。あと一つ例を加えれば、中唐・錢起の七言絶句「過故洛城」(故の洛城に過る)には、

市朝欲認不知処 市朝認めんと欲するも 処を知らず

漠漠野田空草花 漠漠たる野田 草花空し

(全唐詩卷二二九九)

とあるが、白居易は、同題の作で、ただ一字「空」のみを「飛」に変えている(全唐詩卷四六一、文苑英華卷三〇九)。

「空」は、錢起の詩では「空しく草が茂り、花が咲いているだけだ」という意味であり、もともと副詞的な性格と動詞的な性格を合わせもっていた。それを「飛」で改めて統一しなおしたのは、白居易の才であろう。

以上のことと、唐詩以前の詞性について既に述べたことを考え合わせれば、唐詩の「空」は、その詞性に於て、他のいかなる語よりも大きな流動性と互換性を備えるに至っていたことが分かる。

「空」の磁場

右に見た、この文法的な柔軟性が、「空」に、唐詩の文法における中心的な役割を果すことを可能ならしめたものと思われる。「空」は、それが欲する語と、いかなる文法的な状態においても結合することができる。ということは、逆の見方をすれば、「空」をめぐって、一つの文法的な磁場(中心に向けて引きつける力の作用する場)が存在することになる。そして、この磁場のうちに、「空」の文法体系が成立する。

この文法体系を曼陀羅にたとえて述べてみよう。中心には「空」がある。そして中心を取り囲むようにして、まず「自」がある。「自」は、ここを通過して「自己」につながる重要な地点である。左側には「落」、右側には「満」が来る。上方の弧に相当する部分が、「不在」の文法の領域である。「自」のすぐ左手には「急」、右手には「殺」がある。以上の語は皆、同一円周上に位置を占め、そして円の丁度左半分の空白部を「相」、右半分の空白部を「響」が埋めるであろう。

もちろん、この図はあくまでも一つの比喩にすぎず、実際の体系はもっと複雑で、むしろ球体に比すべきものである。参与してくる語も更に多くなるはずであるが、基本的な構成は、やはりこの図に現われた通りであろうと思う。一言でいえば、「空」を中心にして、各々が自らに適わしい位置を占めている。

「一片」と「空」

さて、ここになおひとつ、私のかねて疑問に思っていた語が残る。それは「一片」である。唐詩の「一片」については、李白「子夜呉歌（秋）」の「長安一片月」の解釈などをめぐって、議論されてきたし、松浦友久「詩語の諸相」にも詳しい論考があるが、³²私にはなお完全には納得できない何ものかが残っていた。そこで、「空」の磁場という考え方の中で「一片」を解釈できないか、ここで検討を加えたく思う。

まず「一片」の用例を挙げる。張若虚の「春江花月夜」に、

白雲一片去悠悠 白雲一片 去ること悠悠たり

青楓浦上不勝愁 青楓浦上 愁いに勝えず

王昌齡の「芙蓉楼送辛漸」(芙蓉楼にて辛漸を送る)二首の一に、

(全唐詩卷一一七)

洛陽親友如相問 洛陽の親友 如し相問わば

一片冰心在玉壺 一片の冰心 玉壺に在り

(全唐詩卷一四三)

李白の「示金陵子」(金陵子に示す)に、

落花一片天上來 落花一片 天上より來たり

隨人直渡西江水 人に随つて 直ちに西江水を渡る

(全唐詩卷一八四)

杜牧「送別」に、

一片風帆望已極 一片の風帆 望むこと已に極まる

三湘煙水返何時 三湘の煙水 返ること何時ならん

(全唐詩卷五二六)

「一片」がかかる語は、「白雲」「冰心」「落花」「風帆」である。この他にも唐詩では「月」「石」「氷」「水」「葉」「履」等が「一片」と結びつく。これらの語(名詞)は、一見お互に何の関係もないようであるが、しかし、よく考えてみれば、ある共通点が浮かび上ってくる。まず第一に、これらの語が示す対象は、皆、それがどんな形のものであれ、一つの空間を内包した物質であり、その存在は、その周囲に空間を生むこと。第二に、その物質は、それぞれに均質の素材で成っており、のっぺりとした表面によって被^{おほ}われていること。ここで私は「カオス」の存在状態を、「のっぺりした一枚の布のような形」と描写した井筒俊彦の言葉⁽⁹³⁾を思い起こす。この言葉は、中国古代で言え、⁽⁹⁴⁾「山海經」西山經に帝江(≡帝鴻)即ち渾沌(カオス)のことを「其状如黃囊(ふくら)」「渾敦無面目(のっぺらぼう)」と記していることと符合する。「一片」は、その結合する語がカオスの残片(或いは末裔)であることを示しているのではないだろうか。

次に、「一片」が詩のいかなる場面で使われているかに眼をやろう。先に挙げた例では、張若虚の「去」「不勝」、王昌齡の「在玉壺」、李白の「天上」、杜牧の「已極」「何時」等の語から、そこに、それぞれ「空」の磁場が形成されているのが読み取られるであろう。七言句の引用に偏ったので、今度は五言句のものを引いて、考えてみよう。劉長卿の「平蕃曲」三首の三には、

空留一片石 空しく留む 一片の石

万古在燕山 万古 燕山に在り

(全唐詩卷一四八)

とあって、「空」磁場の存在を示し、また、岑參の「送張卿郎君赴碣石尉」(張卿郎君の碣石尉に赴くを送る)には、

日暮征鞍去 日暮 征鞍去り

東郊一片塵 東郊 一片の塵

(全唐詩卷二〇〇)

とあり、「一片」は、「去」によって生じた「空」磁場の中で使われている。他の多くの例も、やはり同様である。

ここで、「莊子」応帝王篇の「渾沌」の話に一度戻ってみよう。「渾沌」は顔に穴をあけられて死んだ。そして、「韓非子」喻老篇に言う如く、渾沌の犠牲の下に、人間の精神が生まれた。その時「空」はどうなったか。「空」はもと渾沌を取りまく「空虚」のことであっただろう。そして渾沌に竅あなが鑿うがたれると、「空」は渾沌の内部に入りこんだであろう。かくてカオスの充実は飛散し、永遠に失なわれた。かわって、自ら空虚な内面しかもたない人間が、小さな穴から、やはり空虚な外界を眺めながら、自らの歴史を築いてきた。時にそのことを自覚し、また、ほとんどの時はそのことを忘却して。唐詩はその、人間にとってはむしろ本質的な「空」を、最も鋭く感じとった世界である。そして、最も鋭く「空」を感じとることによって、かつてカオスの表面にあげられた「竅」から、逆にカオスの

残存をのぞくことさえ可能となった。(これをカオスの、「空」という体系への侵入と考えてみてもよい。) 唐の詩人たちは、「一片」に、反「空」磁場を見てとり、そこに存在の確かな手ざわりを感じた。

「一片」が「心」にかかる場合があるのも、右に述べたことと関係がある。例えば、中唐・楊巨源の「雪中聴箏」(雪中に箏を聴く)には、

一片愁心与弦絶 一片の愁心 弦と絶ゆ

(全唐詩卷三三三)

とあるが、これは「(愁)心」を、まるでカオスの残存のように、確かな手ごたえのあるものとして、本来は空虚な心の中に感じているのである。先に例示した王昌齡の「一片冰心在玉壺」も、氷の如く清らかな心が、「玉壺」即ち「空」なる心中に存在することを言う。また、初唐・盧僊の「十月梅花書贈」(十月梅花 書して贈る)に、

却想華年故国時 却って想う 華年故国の時

唯餘一片空心在 唯だ一片の空心を餘して在り

(全唐詩卷九九)

とあるが、これは「空」の磁場の中で、ただ「心」のみが存在し続けることを言う。外界の「一片」と、心中の「一片」は、詩人たちにとっては一とつのものである。「一片」が「自」とはほとんど共用されないのは、おそらくこのことと不可分の関係にあるう。李商隱の「贈鄭謙処士」(鄭謙処士に贈る)中の次の句は、そのことを明言している。

浪跡江湖白髮新 江湖に浪跡すれば 白髮新たななり

浮雲一片是吾身 浮雲一片 是れ吾が身

(全唐詩卷五四〇)

*ただし、自覚された時には、本来のエネルギーは弱まっているものだ。

崩壊へ

かくて、ここに「空」を中心とした文法体系Ⅱコスモスが成立する。しかし、「空」はもともと「穴」であり、「からっぽ」であり、「がらんどう」なのである。どう考えても、一つの体系・秩序の中心とはなり得ないはずのものである。その「空」が中心に立った時、体系はどうなったか。次に、その結末を示していると思われる例を挙げる。中唐・張祜の楽府「車遙遙」に、

闔門半掩牀半空 闔門半ばは掩われ 床半ばは空なり

斑斑枕花残淚紅 斑斑たる枕花 残淚紅なり

(全唐詩卷二五、五一〇)

同・陳羽の「吳城覽古」に、

吳王旧国水煙空 吳王旧国 水煙空し

香徑無人蘭葉紅 香徑人無く 蘭葉紅なり

(全唐詩卷三四八)

同・韓愈の「杏花」に、

居鄰北郭古寺空 居は北郭に鄰し 古寺空し

杏花兩株能白紅 杏花兩株 能く白紅す

(全唐詩卷三三八)

右三例は、「空」「紅」押韻型で、「空」は既にそうある状態Ⅱ前提となっており、「紅」は、その「空」の世界の美しさを象徴する語となっている。ちなみに、井筒俊彦によれば、「ギリシャ語の『コスモス』には、美、美しさ、という意味が、原義の重要な一部として含まれていた。」^⑧「空」「紅」そしてまた「花」が相伴って詩に登場することは、「空」が美しい一つの秩序(コスモス)として認識されはじめたことを意味する。時期は、中唐に既にそれははじ

まっっていると考えるべきであろう。

なお、六朝末にも「空」「紅」「花」の結合が見られた。(ただし、ここでは押韻型にはなっていない。) 考えるに、唐詩の「空」文法の多くは、六朝期に既にその萌芽形態が生じている。その出現の順次もおおむね相似の關係にあるようだ。六朝の「空」をなぞるようにして、唐詩の「空」文法ができた。但し、手本よりもはるかに巨大な規模で。

次に挙げる諸例は、仏教思想の影響を受けたものである。中唐・孟郊の「溧陽唐興寺、觀薔薇花、同諸公餞陳明府」(溧陽の唐興寺にて、薔薇の花を觀、諸公の陳明府に餞(別)するに同ず)に、

仏火不燒物 仏火 物を燒かず

淨香空徘徊 淨香 空しく徘徊す

(全唐詩卷三七九)

同・李涉の「重過文上人院」(重ねて文上人の院に過ぎる)に、

無限心中不平事 無限の心中不平の事

一宵清話又成空 一宵清話 又空と成る

(全唐詩卷四七七)

同・周賀の「過僧竹院」(僧竹院に過ぎる)に、

高人留宿話禪後 高人留宿 禪を話せし後

寂寞雨堂空夜燈 寂寞たる雨堂 夜燈空し

(全唐詩卷五〇三)

「空」は、いかなる詞性であれ、皆、肯定的な意味を与えられている。それはもはや窪みを持った凹空間ではなく、積極的に己が価値を主張する凸空間へと変身している。

晩唐になると、「空」の内実が変化するようである。許渾の「憶長洲」(長洲を憶う)に、

魚沈秋水静　魚沈みて　秋水静かに

鳥宿暮山空　鳥宿りて　暮山空し

(全唐詩卷五三一)

劉滄の「題敬亭山廟」(敬亭山廟に題す)に、

花落空庭春昼晚　花は空庭に落ち　昼晩春なり

石林松殿滿青苔　石林松殿　青苔滿つ

(全唐詩卷五八六)

方干の「秋夜」に、

空窓閒月色　空窓　月色　閒かえにして

幽壁静虫声　幽壁　虫声　静かなり

(全唐詩卷六四九)

「空」は、もはやダイナミックな力学をそのうちにもたず、ただ静かで、幽閑なものになってしまっている。劉滄の詩にしても、「空」が満たされるのではなく、ただ満ちたりた風景がそこに在るにすぎない。

「空」が、美しい秩序の中心となった時から、秩序を成す体系は、固定化の路をたどり、その内部の生命力を失っていったものと思われる。あの、「響き」を待っておののく「空虚」は、死滅した。このことは、「一片」の変貌からも確かめられる。「一片」は、六朝詩では、庾信に「水」(鏡詩)、「雨」(遊山詩)に使った例があるが、初唐・盛唐では、固体に用いられることが多く、それが「カオスの残片」としての役割を担う一因ともなった。(「雲」も固体のように扱われた。)中・晩唐になると、「一片」は、気体と結合するようになる。例えば、楊巨源の「題賈巡官林亭」(賈巡官の林亭に題す)に、

一片寒光動水池　一片の寒光　水池に動く

(全唐詩卷三三三)

また、杜牧の「三川馭伏覽座主舍人留題」（三川馭にて伏して座主舍人の留題を覽る）に、

一片餘霞映馭樓 一片の餘霞 馭樓に映えいず

（全唐詩卷五二四）

右二例の「寒光」「餘霞」は、気体というよりも、「光」又は「光を浴びて輝く気体」というべきだろう。私は、この傾向を、それまでは固体（のっぺりとした表面体）に凝縮されていたカオスのエネルギーが、「光」という形で分散しはじめたのではないかと考える。（庾信が液体を用いたのは、カオスのエネルギーの蓄積過程であったと考えることができる。）
 続いて晩唐には、「一片秋」という言い方が現われる。趙嘏かの「自遣」（自みづから遣やる）に、

江連故国無窮恨 江は故国に連なる 無窮の恨み

日帶残雲一片秋 日は残雲を帯ぶ 一片の秋

（全唐詩卷五四九）

「一片秋」は、「秋の気配が辺り一面に広がっている」という意味である。⁽⁹⁷⁾ここに「一片」に含まれていたカオスのエネルギーは、無限に拡散し、つまりカオスの残片は霧消した。それは同時に、「空」磁場の崩壊に他ならない。

注

本稿では、漢六朝の詩歌は、遼欽立輯校「先秦漢魏晉南北朝詩」（中華書局 一九八三年）に依り、唐詩は、「全唐詩」（中華書局 一九六〇年）に依る。テキストに特に問題がある場合は、その旨を付記する。

- (1) "The Poetry of Wang Wei" by Pauline Yu, Indiana University Press, 1980.
- (2) 岡村繁教授退官記念論集「中国詩人論」（汲古書院 一九八六年）所収「王維輞川集校注」九七七頁。
- (3) 劉琳校注「華陽國志校注」（巴蜀書社 一九八四年 成都）四九四頁。

- (4) 「広弘明集」(四部叢刊初編所収)卷二十三。
- (5) 鈴木虎雄訳解「玉台新詠」(岩波文庫 昭和三十年)五七頁の訳による。
- (6) 前野直彬著「山海経・列仙伝」(集英社 全釈漢文大系卷三三 昭和五十年)一三九頁。
- (7) 「青苔」の語は、「淮南子」秦族訓に見えている。その高誘の注に「青苔、水垢也」とある。
- (8) 本田濟著「易」(朝日新聞社 新訂中国古典選卷一 昭和四一年)三八七頁参照。
- (9) 「毛詩引得」(哈佛燕京学社引得特刊九)による。なお「詩経」は「十三経注疏 詩経」(芸文印書館印行)による。
- (10) 段玉裁注「説文解字注」(芸文印書館印行)第七篇下。
- (11) 「楚辞」は四部叢刊初編本「楚辞補注」による。
- (12) 吉川幸次郎著「論語」(朝日新聞社 新訂中国古典選卷三 昭和四一年)三九・四〇頁参照。
- (13) 金谷治著「孟子」(朝日新聞社 新訂中国古典選卷五 昭和四二年)四七八頁参照。
- (14) 福永光司著「莊子 外篇・雜篇」(朝日新聞社 新訂中国古典選卷九 昭和四二年)八〇〜八二頁参照。
- (15) 富山房刊「漢文大系八 韓非子翼」(明治四四年 増補昭和五一年)七一・一六参照。
- (16) 福永光司著「莊子 内篇」(朝日新聞社 新訂中国古典選卷七 昭和四十年)三一四・三一五頁参照。
- (17) 曾我部静雄訳註「塩鉄論」(岩波文庫 昭和三四年)九三頁参照。
- (18) 「漢書」は中華書局点校本「漢書」(一九六二年)による。
- (19) 松浦崇編「全漢詩索引」權歌書房 一九八四年刊。
- (20) 遂欽立輯校「先秦漢魏晉南北朝詩」上二〇一頁の解説参照。
- (21) 王明著「抱朴子内篇校釈」(中華書局 一九八〇年)二三〇頁。
- (22) 「太平広記」卷二七二の「晋人」石崇婢翹風の項には、翹風作の五言詩を載せるが、その中に「坐見芳時歇、憔悴空、自嘔」(坐して芳時の歇くを見、憔悴して空しく自ら嘔う)の句がある。「広記」は出処として「王子年拾遺」を挙げるが、これは虚構を多く含む書であり、また詩の表現から見て、この詩は晋代よりも後の作ではないかと考えられる。
- (23) 「大正大蔵経」四七五 姚秦三蔵鳩摩羅什訳「維摩詰所説経」第九入不二法門品。なお、この部分、呉・月氏支謙訳では「色空、不色敗空、色之性空」(大正大蔵経四七四)となっている。

- (24) 三浦晋撰「詩轍」(中文出版社影印本 一九七七年)。
- (25) 釈大典「詩家推敲」(汲古書院 漢語文典叢書卷一所収)。
- (26) 「同志社外国文学研究」第四七号(昭和六二年)所収の拙論「不在」の文法について——唐詩文法論序説」参照。
- (27) 前掲拙論四・五頁参照。
- (28) 同 三一頁参照。
- (29) 本稿40頁を見よ。
- (30) 前掲拙論三八頁参照。
- (31) 同 四六頁参照。
- (32) 松浦友久著「詩語の諸相——唐詩ノート」(研文出版 一九八一年)第二部七の「長安一片月——『一片』の用法とそのイメージ」。この論文の初出は一九七四年。
- (33) 井筒俊彦「コスモスとアンティ・コスモス——東洋哲学の立場から」(岩波書店「思想」一九八七年三月号所収)一七頁。
- (34) 前野直彬前掲書一四四・一四五頁参照。また、袁珂編著「中国神話伝説詞典」(上海辞書出版社 一九八五年)の「渾沌」及び「帝江」の項が参考になる。
- (35) 「維摩經」第二方便品に「是身如浮雲、須臾交滅」(鳩摩羅什訳、玄奘訳同)とあるのを承けるであろう。
- (36) 井筒俊彦前掲論文十一頁参照。
- (37) 晩唐・鄭谷の「興州東池」(全唐詩卷六七四)にも「徹底千峯影、無風一片秋」と見える。
- (補注) 「斜」と「空」の結びつきは、中唐に見られる。孟郊「李少府序弔李元賓遺字」(全唐詩卷三八一)に「斜月弔空壁」(弔、文苑英華卷三〇三作吐)、元稹「宿石磯」(全唐詩卷四一四)に「五更斜月入空船」、賈島「哭胡遇」(全唐詩卷五七二)に、「空山暮影斜」など。晩唐では、張賁「旅泊吳門」(全唐詩卷六三一)に「斜空斷統雲」と見え、また陸翹「閑居即事」(全唐詩卷六八八)に「書牖日空斜」、貫休「山居詩」二十四首の四(全唐詩卷八三七)に「碧芙蓉裏日空斜」とある。「斜」と「空」の結合は、「空」の文法体系の固定化と並行するようである。